

# 航空

思い出

——悲劇を繰り返すな——

愛知県 河合 登

かつて昭和二十年以前においては、日本国民の三大義務は、納税、教育と兵役であった。その当時、日本男児と生を受けたものは、二十歳になると徴兵検査が行われて、合格になると兵役に服さなければならなかった。どうせ軍隊に入るならば早く兵役を終えて定職に就きたいと思い、十七歳の時に現役志願をした。

昭和十七年一月十日、福井県鯖江連隊中部第六十二部隊に入隊、同月十八日北支に向けて出発、荒れ狂う

玄界灘を改造貨物船で釜山に上陸、朝鮮縦断、満州を経て北支に到着した。北支派遣第四二八五部隊第三中隊であった。青島から済南に通ずる鉄道沿線の周村という城壁に囲まれた町の中にある公園であった。

到着した夜、旅の疲れでぐっすり寝込んでいると、突然「非常召集」という大声。飛び起きると、分遣隊が敵の襲撃を受けて全滅したとのこと、内心これはえらいところへ来たものだと思った。

一月の北支の風は冷たく、現地の一期教育は厳しかった。何しろ歩くことはほとんどなく、すべてが駆け足で、何をするにも競争だ。私は軽機関銃班であったので、小銃と軽機両方の兵器手入れと、班長、班付、古年兵の兵器の手入れや掃除、洗濯、食事の後片付けなど毎日が目の回るほど忙しかった。また乾季には、黄

塵、黄砂が舞い上がり、防塵眼鏡をつけての演習もしばしばあり、そんな時には洗濯はもちろん兵器の手入れも大変だった。

また、北支の土饅頭（墓地）付近には金平糖に似た草の実があり、遮蔽物利用の演習、特に匍匐の時に手や足に突き刺さり閉口したものだ。学科は兄から事前に操典や各教本の綱領や目的などを覚えて行くようにいわれていたもので、その点大助かりだった。一期の教育が終わると部隊本部（博山）において下士官候補の集合教育があり、教育中においても作戦や討伐にも参加した。昭和十七年十二月一日、下士官候補者隊に入り、まもなく航空科転科の命令がでた。

#### 航空科転科

宮崎県児湯郡富田村第九航空教育隊に到着したとき、格納庫前では九七式重爆撃機で初年兵教育がなされていた。教育隊の西側に新田原飛行場があり、落下傘部隊の降下演習が良く見えた。航空隊での針路は自由選択だったので、それぞれが操縦、整備、電気、無線、自動車などの科目から選り、私はできるものなら飛行

機の操縦者になりたいと思い、操縦を志願し、東京立川航空技術研究所で受検、合格した。

#### 飛行学校入校

昭和十八年四月一日、大刀洗陸軍航空教育隊隈庄教育隊に入校することができた。最初の約一カ月は地上での教育で、細部についていろいろと指導を受けてから助教と同乗飛行になる。夢にも思わなかった飛行機への搭乗、宿望の大空に舞い上がった時は何とも言いようのない嬉しさに浸った。

#### 操舵感得

助教は前方席、生徒は後方座席のダブル操縦装置になっていて、上空で操縦桿を操作して、また踏桿を動かしてみても舵の利き具合を体得するのだが、ちょっと縦桿を引いただけで物凄く上昇し、また押せば反対に体が浮き上がるように急降下し、踏桿操作も同じで微妙な操作でも飛行機が敏感に動くのにはびっくりした。飛行機の操縦は危険が伴い、間違えれば自然淘汰（死）であるので、不適當だとみなされたものは逐次原隊へ帰されていくのだった。

## 場周飛行

場周飛行とは、離陸上昇して所定の地点で、第一、第二、第三、第四と旋回して降下、着陸する訓練で、飛行場左側を高度三〇〇メートルで半周するのだが、一回の離陸から着陸までの所要時間は七分か八分であった。この短時間に覚えることは、①地上滑走、②指定位置からの離陸、③上昇旋回、④水平旋回、⑤水平直線飛行、⑥降下旋回、⑦降下角度と速度、⑧設置位置、設置操作、目測等で、わずかの時間に覚えなければならなかった。

操縦の教育編成は助教一人に対して飛行兵四ないし五人で、逐次交替で乗り助教の教育を受ける個人教育の最も徹底したもので、精神的また技術方面にこれ以上密接かつ真剣になる教育指導は他に類がないと思う。言うは易く、行うは難し、この操縦術は血の滲むほどの努力を要し、また勉強も要する。水平飛行一課目においても一定方向の保持、高度の保持、機首が上がったと思つて操縦桿を押し下げ過ぎ、上げれば反対に上がり過ぎ、波状飛行になってしまう。いずれの課

目においても同様で、一通りの操縦を覚えるのには並大抵の苦勞ではなかった。

## 単独飛行

離陸、着陸、空中での各種操作が会得できて、助教からOKの許可が下りるといよいよ単独飛行だ。操縦教育の中で単独飛行ほど嬉しく感動するものはない。大空へ一人で飛べた感激は筆舌に尽くし難い。

離陸すれば、熊本の市街が眼下に広がり、東方には阿蘇の噴煙が立ち上り、西の方には宇土城が美しく見えて、胸の高鳴りを感じる。緊張して着陸態勢、接地、思わず胸を撫で下ろす一瞬である。

離着陸が上達すると逐次難しい課目に入っていく。垂直旋回、急反転、緩反転、急上昇、急降下、宙返り、宙返り反転、きりもみ、計器飛行、背面飛行等、九五式一型練習機にて六カ月間の教育が終わると、今度は実用機による教育となる。

戦闘機、偵察機、軽爆、重爆、輸送機などに分かれるが、私は軽爆で朝鮮咸鏡南道宣徳朝鮮第百十部隊において九九式襲撃機による戦技教育を受けた。

三菱で製造された飛行機で二人乗り、九五〇馬力エンジンで向翼に固定銃が二門、翼下に爆弾二〇〇キロ積載できる地上攻撃用の飛行機での戦闘技術の教育で、空中戦に必要な特殊飛行、空中および対地射撃、編隊、急降下および緩降下爆撃、超低空対地攻撃法等実戦に即応する教育が六カ月間行われて、戦技教育の課程が終了すると卒業になり、胸に操縦記章を着けて、各戦隊に配属となる。

#### 平壤教育隊転属

私は朝鮮平壤府朝鮮第一百部隊第十三教育飛行隊に配属になった。平壤は朝鮮第二の都市で、東側に大同江が流れており、その左岸に飛行場があった。飛行場から河を隔てた向こう側に小高い山があり、牡丹台と乙密台が良く見えて、低いところに玄武門があった。乙密台は、かつて日清戦争の時に、元山部隊が進攻したが、原田重吉一等兵が一人で楼閣を乗り越えて門扉を開き、日本軍の突入を成功させたという戦史に輝くところである。

教育隊に入り今までの生徒が反対に教育指導する立

場になるのだから真剣そのものであった。

最初の生徒が予備下士十期生であった。予備下士とは通信省乗員養成所の出身者で、四人を担当して戦技の教育を行った。昭和十九年八月、少年飛行兵十五期が入り、戦技教育の終わるころには戦局急迫、当部隊も教育飛行隊から錬成飛行隊となり、十五期少年飛行兵は、そのまま留まり、補充部隊として戦争技術の錬成教育を行うこととなった。

昭和二十年に入ると、南方各地からの悲報が相次ぐようになり、敗戦の方向に進んでいた。そこで戦局打開には、レイテ島にて戦果を上げた特別攻撃法をもつて一機一艦を葬り、敵艦船を撃破して戦況を覆さなければ日本の本土が危ないことになる。われわれパイロット全員が死を覚悟して特攻隊に進んで志願した。一命を投げうって国のために死するは軍人の本懐と断腸の思いであった。教育も特別攻撃法に変わり、高度二二〇〇メートルから急降下して、一〇メートルにて爆弾を投下して離脱する訓練であった。高度一〇メートルになってから引き上げるのでは情性で地面に衝突して

しまう。高度計は指し遅れがあるので目測だけである。ある日、少年飛行兵が訓練中に高度を下げ過ぎるので、目標布板を撤去したところへ突入して、われわれの眼前において二人とも殉職した事故があった。目測が馴れてくると今度は洋上訓練だ。海上での高度の判断は陸上より難しいのだ。小島を敵艦とみなして、超低空接敵攻撃訓練であったが、この時も一機が海中に突入し、幸いにも氷上に乗り移り一命を取り止めた。

昭和二十年三月には戦況が一段と悪化し、私たちの飛行機は通常二〇〇キロ爆弾搭載のところを五〇〇キロ懸吊できるように改造することになり、松本の飛行場へ飛んだ。これは特攻の準備だと直感した。途中浜松の飛行場で燃料補給をして離陸の時に車輪がパンク、仕方なく旅館に一泊、翌朝、整備の伍長と相談して郷上訪問飛行を内緒で行うことにした。昭和二十年三月十六日、萩平の日吉神社の祭礼の日だと思う。西郷小学校上空より急降下、四ツ谷上を一〇メートルぐらいに下げ三ないし四回繰り返すと、父親が日の丸の旗を振り答えてくれた。その後松本より改装工事の三日間

外泊休暇があり、それぞれ故郷へ帰ったが、これが親兄弟との訣別となった者が多かったようだ。

平壤へ着くと、待っていたかのように特攻隊編成命令が出た。と号第二十八飛行隊および誠第二十八飛行隊、三月三十日には振武第七十一隊、七十二隊、七十三隊の編成命令が出された。振武第七十三隊高田隊は、心の整理をする暇もなく、発表三日後には大刀洗飛行場へ集結せよとの命令が出た。部隊全員が飛行場に整列して見送りをした。ちょうど私に、予備機を操縦せよとのことで四月五日に大刀洗飛行場に向かった。到着したときには既に明朝、鹿児島の方世飛行場へ前進せよとの命令が出ていたが、隊員等はいつもと変わらず明るい表情で、柑木の旅館で冗談を飛ばしていた。しかし今夜が最後の夜である。一緒に写真を撮り、夜は呑めない酒を酌み交わし歌った。空しき思いを歌で紛らわすかのようであった。

#### 雷撃隊の歌

鉄砲弾とは俺等のことよ

待ちに待った門出ださらば

友よ笑ふて 今夜の飯は

俺の分まで食ってくれ

でかい魚雷を翼に抱いて

俺の得意はいざ体当たり

愉快じゃないか仇なす艦に

上がる火柱 水柱

男散るなら桜の花よ

散って九段で又咲き返へる

散って行くのは雷撃魂

笑うて咲くのは大和魂

私は若き少年飛行兵の元気な歌を聞いていると、思わず熱い涙が込み上げてきた。だが門出前の飛行兵に涙を見せまいと我慢していると、隊員の一人が私に「班長殿も行ってくれますか」。ハッと我に返り「俺も後から行くからしっかり頼むぞ」と言うと、さも安心

したようにまた歌い続けた。六日の朝六時起床、万世の飛行場に行くのと、地元の男女総動員で手厚い接待をしてくれた。

午前十時ごろ、全員が本部前に集合、戦況説明や細部の注意があり、各人に地図が渡された。地図には沖繩への方位や艦船の位置も記入してあった。ピスト（控所）前には白布を掛けた机の上に別杯の用意がなされ、参謀戦隊長が一人一人に酒を注いで回る。最後の酒で喉を潤す。別杯の式も終わり、隊員一同横列に並び出撃の申告を行い、隊長の号令で東の空を仰いで宮城を遥拝して、皇室の繁栄と皇国の安泰を祈念した後、各人の故郷に向かって深々と頭を下げて、父母や兄弟等に別れを告げる。

そのころには、飛行機は松林の中から出されて飛行場いっぱいには試運転を行っている。一回解散すると、高田隊長が私の前にこられて敬礼「ご苦労さんでした」と短い一言、私も敬礼したが、何と言ってよいものか戸惑った。これが永遠の別れになってしまふなんてどうしても信じられない思いであった。全員が整備員に

お礼を言って機上の人となる。そのころには、もう次から次へと離陸して行く。いよいよ高田隊の番だ。車輪止めが外されて出発線へ着く。出発良しの手旗信号で、隊長機は手を振って出発、これに続いて十一機の離陸が終わると全機は空中集合して編隊を組んで飛行場の上空で翼を大きく振り、南の彼方に消えて行った。われわれは成功を祈り黙祷をした。

同じ日に連合艦隊は、陸海軍の航空兵力の全力を挙げた航空総攻撃「菊水作戦」を発動、参加した特攻部隊は、九州、台湾の各基地から海軍機二九一機、陸軍航空部隊は、第六航空軍一三三機であった。作戦参加機は六日の十時十五分から十二時三十分までの間に、鹿屋をはじめ九州各地から次々発進した。一方、制空部隊の零戦一〇四機は、四派に分かれて沖繩の制空に任じ、陸海軍戦闘機は奄美大島付近上空において往復運動を行った。その他の海軍機はすべて特攻と化して、全機時間差をもって沖繩の海上にひしめく米艦船群目がけて肉薄突入した。こうした航空特攻に呼応して、同日午後、戦艦「大和」以下第一遊撃艦隊も沖繩の敵

上陸地点に向け進撃を開始した。こうした大作戦により、多大の戦果を挙げることができたが、わが軍の損害も予想以上に多かったのである。

私の部隊から、続いて五月二十七日、振武隊七十二隊が同じ万世飛行場から沖繩に出撃、全機突入散華した。この七十二隊の隊長は私らの中隊長（佐藤中尉）で小隊長（新井一夫軍曹）が同僚であった。このようにわれら一〇一部隊から三十一人の戦友が命を投げうって国に殉じた。このような状況下で私達操縦者は、死の宣告を毎日待ち続けていたのだった。

沖繩戦が敗色濃くなったころ、部隊は満州に移駐して教育訓練の任務を継続する方針で、先発隊五十三人が満州の錦西飛行場に出発した。それもソ連軍参戦の三日後のことで、終戦後想像を絶する苦勞をされたのだった。

八月十五日、重大放送があるというので全員がラジオの前に整列して頭を垂れて拝聴、次第に嗚咽に変わっていった。敗戦である。

茫然自失の日が暮れようとしたころ、異様な爆音で

飛ぶ飛行機があった。何だ！と思う間もなく、ドカーンと大音響、それは少年飛行兵十人余りが重爆撃機「吞龍」で自爆したのだった。こうした自殺が相次いだので、師団司令部から無駄死には絶対しないようにと訓示があった。

八月二十二日、第五航空軍参謀が飛来して、朝鮮半島は三十八度線を境に南北に分け、北をソ連、南をアメリカが管理し、日本軍の武装解除に当たることになり、このため第五航空軍隷下部隊を三十八度線以南に集結、二十三日午後五時までに移動せよ、との命令で、部隊は早速移動の準備にかかり、私らは飛行機で郡山飛行場へ状況偵察を行い、部隊に報告帰隊する予定だったが、その時にはすでに平壤飛行場にソ連機が着陸したので、そのまま郡山に居るようにといわれ、地上部隊も全員が危機一髪、シャットアウト以前に南鮮に移動することができた。

しばらく郡山の学校に宿泊していたが、九月十八日論山に移動、十月初めに武装解除、武器は米軍に提出、重要書類は全部焼却処分し、軍隊手帳、階級章、写真

まですべて処分して、十月八日釜山に向けて出発した。釜山には在留邦人や何万人もの軍人が並んで帰還船を待っていた。一方、アメリカ軍は岸壁に軍艦を接岸してポリウムいっばいでジャズを流し、余暇を楽しむかのように甲板から物珍しそうに私たちを眺め、監視していた。

二日間波止場で野宿した。何万人もの人が用を足す施設などはなく、全員が棧橋突端から海の方へ尻を向けて用足しをした。その姿は屈辱としか言いようもなかった。

十月十二日、ようやく乗船することができた。十二日朝萩港に上陸、復員手続きを終えて親しき戦友に分かれを惜しみながらそれぞれの故郷へと向かった。

豊橋駅に到着、下車すると、見渡す限りの焼け野原で、焼跡にヌカビルだけが焼けただれた姿でしょんぼりと立っていた。敗戦軍人の復員は淋しく、また情けなかった。